

知財・情報フェアに見る「生成AI×発明」の進化：2025年 vs 2026年

2025年：生成AI活用の転換点



主な活用は「特許調査・明細書作成」
当時の重心は、定型的な知財業務の
効率化にありました。



チャット型の「壁打ち」が主流
人間がAIと対話しながらアイデアを
広げるスタイルが一般的でした。

2026年：上流工程×エージェント化への前進



「発明発掘・整理」への本格進出
NTTデータの参入により、研究開発と
知財を繋ぐ上流工程支援が加速しました。



AIエージェントとMCPの普及
DB直結型の自律エージェントが、調査
から提案書作成までを統合的に処理。



「人間主体・AI支援」の設計思想
AIは発明を自動生成するのではなく、
人間の発掘を支援する役割が明確化。

項目	2025年（第34回）	2026年（第35回）
技術キーワード	チャット型LLM、 RAG	AIエージェント、 MCP（DB直結）
主な支援領域	特許調査・ 明細書ドラフト	発明発掘・ 発明提案書作成
象徴的な動き	トヨタTD等による 先行事例	NTTデータの 本格参入